

ナザレからカペナウムへ

ベレーシート

●2017年の元旦が聖日礼拝と重なる珍しい年です。この日を迎えるに当たって新約聖書にある第一の福音書である「マタイの福音書」(マタイによる福音書)を取り上げ、特に、マタイの福音書の特徴であるまとまった「五つの説教」を取り上げていきたいと考えています。とはいえ、その「五つの説教」が語られた背景(コンテキスト)も含めながら取り上げます。今回は、イエシュアの公生涯の最初の出来事、すなわち、イエシュアが30年の沈黙を破って、宣教の働きを開始される(4:12)から始めようと思います。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 4章 12～17節

- 12 ヨハネが捕らえられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた。
- 13 そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。
- 14 これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、
- 15 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。
- 16 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」



1. 旧約の完成者イエシュア

●マタイは、神の御子イエシュアの生涯の全体(誕生～受難、教えと働き)が旧約の預言者たちを通して予告されていたこと、そのすべてが神のご計画に他ならないことを福音書によって証言しようとしています。特にマタイは、イエシュアが旧約の預言の成就者として、また律法の完成者であることを強調しています。それゆえ、マタイの福音書には、「このことが起こったのは、預言者を通して言われたことが成就するため」という定型的な表現が多く用いられています。

(1) 「ガリラヤ」へ立ちのかれたイエシュア

●「ヨハネが捕らえられたと聞いたイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた」(4:12)とあります。ヨハネとはイエシュアの前駆者として神によって立てられた旧約最後の預言者です。その彼がユダヤの荒野においてすでにその働きを開始していました。ヨハネは自分の使命について、「私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のあるかたです。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。」(3:11)と公言しています。「はきものを脱がせる」という行為は当時においては奴隷のする仕事でした。ヨハネは齒に衣着せる厳しい悔い改めのメッセージをした預言者ですが、自分とイエシュアと比べるならば、自分は奴隷としての価値さえない者であると告白したのです。その彼(ヨハネ)が捕らえられたことは、イエシュアにとって大きな意味を持っていたようです。「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。」(伝道者の書3:1)とあるように、ヨハネの逮捕の出来事はイエシュアの宣教の本格的な働きを開始すべきことを意味していたようです。それゆえイエシュアはガリラヤへ立ちのかれたのです。イエシュアがベツレヘムで誕生されたのも、またそこからエジプトに下り、そこからユダヤに戻り、ナザレで育ったのにもすべて意味があります。そのすべてが旧約の預言者たちによって預言されていたのです。例えば、以下のように・・・

- ① ベツレヘムでの誕生・・・ミカ5章2節
- ② イエシュアの誕生による最初の殉教・・・エレミヤ31章15節
- ③ エジプトからイスラエルの地へ・・・イスラエルの歴史の踏み直し
- ④ ガリラヤのナザレへ・・・イザヤ11章1節の「若枝」(「ネーツェル」 נֶטֶר)

(2) 「ナザレ」から「カペナウム」へ

●イエシュアの宣教の開始をルカはナザレとし、そこでの出来事を記していますが(ルカ4:12～30)。ナザレでの出来事は、イエシュアの生涯の縮図と言えます。しかしマタイはそれをすべて省略し、ガリラヤの町カペナウムから宣教を開始したとしています。なぜ、マタイはナザレでのことを記していないのかといえば、宣教の開始場所がナザレであったとしても、カペナウムであったとしても、ガリラヤから宣教を開始するという神の計画と意図において何ら変わることがないからだと言えます。

2. なにゆえにイエシュアはガリラヤから宣教を開始されたのか

(1) 「異邦人のガリラヤ」とは

●マタイはイエシュアがガリラヤから宣教を開始されたのは、預言者イザヤが預言していたことだとしています。

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。

16 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」

●「光が上った」の「上る」と訳された「ナーガハ」(נָגַח)は、「輝く、照る、照らす、(光が)放つ」の意があります。「異邦人のガリラヤ」とありますが、イエシュアは異邦人に宣教しようとしたものではありません。ではなぜ、「異邦人のガリラヤ」と言われるのかといえば、本来、神がイスラエルの民に与えられた地に異邦の侵入者が占拠して、イスラエルの民以外の住民が植え付けられたからです。血統の純潔は喪失し、軽蔑の対象を受ける地になってしまったことを意味しています。



●B.C.732年、アッシリヤによって北イスラエルが滅亡する10年ほど前に、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルの率いる大軍が怒涛のように攻め寄せ、多くの町が完璧なまでに蹂躪されました。その悲惨な舞台となったのがガリラヤ(ナフタリの地、ゼブルンの地)だったので。多くの町や村が破壊されただけでなく、労働力になりそうな者たちはみな捕虜とされ、連れ去られたのでした。

●Ⅱ列王記 15章 27節には次のように記されています。

【新改訳改訂第3版】Ⅱ列王記 15章 29節

イスラエルの王ベカの時代に、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルが来て、イヨン、アベル・ベテ・マアカ、ヤノアハ、ケデシュ、ハツォル、ギルアデ、ガリラヤ、ナフタリの全土を占領し、その住民をアッシリヤへ捕らえ移した。

●「ガリラヤ」(ヘブル語の「ガーリール」גַּלְיָלָה)は、戸のちょうつがいの回転軸を意味します。それは地図を見ると分かるように、ナフタリとゼブルンの地域がガリラヤ湖を西から取り巻いているように見えます。ユダヤの中心地であるエルサレムに比べるとガリラヤはまさに軽蔑の地であったのです。

(2) カペナウムでの宣教の開始が意味すること

●イエシュアはナザレからガリラヤ湖畔の最大の町であるカペナウムに移り住み、そこを拠点にして宣教を開始されました。新改訳は「カペナウム」と表記しますが、新共同訳は「カファルナウム」で、ギリシア語の「カファルナウム」(Καφαρναουμ)に近い表記になっています。ヘブル語表記では「ケファル・ナフーム」(כַּפְּרַן נַחֻם)となり、「ナホムの村」(「慰めの村」)という意味です。もし「ケファル」が「カーファル」(כַּפַּר)という動詞から来ているとすれば、それは「罪を赦す、罪が赦される」という意味になります。その意味ではイザヤが預言したように、「暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」と言えるかもしれません。つまり、それは、悲惨と暗黒の地である異邦のガリラヤに希望と慰めが訪れたということになります。イエシュアの公生涯における多くの働きが、イスラエルの中心であるエルサレムにではなく、辺境のガリラヤであったことは、イスラエルの

回復を計画しておられる神の熱心(「キヌアー」 קִנְיָה)によること以外の何ものでもありません。

(3) まだ「大なる光」を知らずにいるイスラエルの民

●ここでもう一度、マタイが引用したイザヤの預言に注目してみたいと思います。マタイはかなり自由に引用しています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 9章 1～4節

- 1 しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。
- 2 やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

●マタイが引用しているのは 1～2 節ですが、この預言はある意味において成就していますが、以下の 3～4 節の預言はまだ成就していません。これからのことです。「光」の概念が神のご計画、みこころ、御旨、目的だとするなら、その光が輝くことは神のご計画が地に実現することを意味します。そのことと「喜び」は密接な関係にあります。

9:3 あなたはその国民をふやし、その喜びを増し加えられた。

彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。

9:4 あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、

ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。

●3 節の「あなた」とは神のことです。名詞の「喜び」が 2 回、そして動詞の「喜ぶ」が 1 回、繰り返されています。イザヤは神の完全な救いの訪れを見て、喜びにあふれて神に喜びの叫びをあげています。なにゆえにそのような喜びにあふれているのでしょうか。それが 4 節に記されています。神が神の民の重荷のくびきと、肩のむち、しいたげる者の杖を「砕かれたからだ」と預言的完了形で記されています。名詞の「喜び」を表す「シムハー」(הִשְׂמֵחָה)、および動詞の「サーマハ」(שָׂמַח)は、特に詩篇に多く用いられていますが、いずれも、爆発的な喜びを表わす終末的な語彙と言えます。イザヤ書 9 章 3～4 節の約束は、イエシュアの再臨によって実現するメシア王国の預言なのです。

3. イエシュアのガリラヤでの宣教メッセージ

●ナザレ人イエシュアはカペナウムをガリラヤ宣教の拠点とされました。それは、自分の故郷のナザレでは拒絶されたためです。それゆえ、イエシュアはカペナウムで安息日ごとに人々に教えられたとあります(ルカ 4:31)。そして「人々はその教えに驚いた。そのことばには権威があったからだ」とあります(同、4:30)。「権威があった」とはどういうことでしょうか。おそらくイエシュアに人々が驚くような言行一致

の姿が見たのかもしれませんが。

●いずれにしても、イエシュアが最初に語った「悔い改めなさい。天の御国は近づいた。」というメッセージには、イエシュアのこれからなされるすべての教えと御業が意味する中核が記されています。それはバプテスマのヨハネが語ったメッセージと全く同じですが、表面的には同じに見えても、本質的には全く異なるメッセージなのです。ヨハネの「悔い改め」には「自分の罪を告白して、水のバプテスマを受ける」だけでなく、「悔い改めにふさわしい実を結ばなければ、さばかれる」というものでした。ところが、御国の王であるイエシュアが命じる「悔い改め」は、ただただ「神に立ち帰る」だけなのです。何度でも・・・。

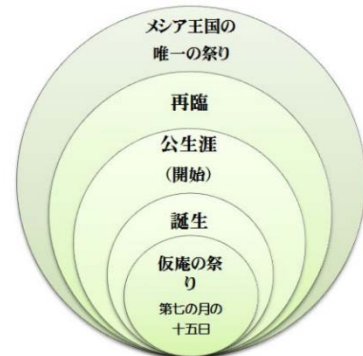
【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 4章 17節

この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

●マタイは「天の御国」とありますが、マルコは「神の国」と記しています。「天の御国」とは何なのでしょう。イエシュアの語る教え、また奇蹟のみわざはどこを切ってもすべてこの「天の御国」のデモンストラーションなのです。使徒パウロもエペソの教会の人々に「御国の福音」を余すところなく語ったとあるように、この「御国の福音」は神のご計画の成就と密接な関係を持っています。

(1) イエシュアの生涯における宣教開始の時期

●イエシュアが宣教を開始されたのは、およそ30歳です(ルカ3:23)。いわゆる3年半にわたる公生涯は、公に宣教を開始することによって始まりました。イエシュアが十字架にかけられたのは過越の祭りでしたから、その半年前ということになります。それは仮庵の祭り頃です。この時期は右の図でも分かるように、神のご計画においてとても重要な時期であることがわかります。



●イエシュアが30歳になるまでなぜ働きを開始されなかったのでしょうか。12歳の時点ですでにエルサレムにいる律法学者たちに立ち向かえる十分な知識を得ていたにもかかわらず、30歳になるまで、沈黙の時を過ごされました。しかしその間、神の永遠のご計画を成し遂げるための十全な準備をなさっていたと思われる。律法によれば、祭司の働きは30歳になってからでした。イエシュアの「教える」という祭司的務めをなすために、律法に従われたのです。

(2) 「悔い改めなさい」

●イエシュアが語ったメッセージは、「悔い改めなさい」という命令でした。ギリシア語の「悔い改める」は「メタノエオー」(μετανοέω)、ヘブル語は「帰る」を意味する「シューヴ」(שוב)です。どこに向かって帰るのかと言えば、神に向かって帰ることです。そこには、罪を悔いるとか、懺悔してとかの条件

は一切ありません。ただただ神に「向き直る」ことが求められています。「悔い改めなさい」のギリシア語は現在命令形です。これは一回的な自覚的な堅い決心ではなく、何度も何度も繰り返して、神に向かって立ち返ること、向き直ることを意味しています。

(3) 「天の御国が近づいたから」

- 「悔い改めなさい」との命令の理由が語られます。その理由とは「天の御国が近づいたから」というものです。「天の御国」の「御国」は「バシレイア」(βασιλεία)、ヘブル語は「マルフト」(מַלְכוּת)です。御国とは王の支配する国、つまり、メシア王国のことです。その支配が「近づいた」とはどういうことでしょうか。ギリシア語の原文を見ると、「近づきつつある」という意味ではなく、また、限りなく近づいているというでもなく、すでに近くに来てしまっているという「エッグゾー」(ἐγγίζω)の現在完了形が使われています。

- 現在完了形とは、過去になされた出来事、その結果の状態が現在も続いていることを表わします。つまり、イエシュアの到来によって、「御国」がすでに来ていることを意味しているのです。それゆえ、イエシュアは「立ち帰る」、神に「向き直る」ことを繰り返し命じているのです。神はその「立ち返り」に対して、必ずや恵みをもって報いてくださるからです。これは預言者イザヤも語っていることです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 30章 15節

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。

「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」

しかし、あなたがたは、これを望まなかった。

- なにゆえに、「立ち返る」者が「力を得るのか」と言えば、それは主が「あなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる」からです(同、30:18)。

- イエシュアの語る「御国の福音」とはいかなるものか。そのことをじっくりと学んでいく新しい年であるように祈りたいと思います。